

鈴木格禪元所長の遷化を悼む

鈴木格禪元所長は平成十一年八月十九日午前十時四十五分直腸癌肝転移のため横浜市の病院で逝去された。享年七十二歳。鈴木格禪元所長は平成元年四月から九年三月まで本研究所の所長として研究所の運営にご尽力くださったが、七十歳定年制の規定に従い、平成九年三月に退任された。ご退任によって、本研究所の所長職を退かれることを惜しみ、私は本研究所刊行の『駒澤大学・禅研究所年報』第八号の巻頭言に「鈴木格禪所長のご退任を惜しむ」と題して先生のそれまでのご業績とご活躍を書いたばかりであった。その中で、これからはわが国だけでなく、国外の人々にも禅の神髄を伝道されることを念願している旨のことがばをもって結びとじていた。

確かに先生は退任後はまさに東奔西走の日々であったことは周知の事実であったが、実はもうその頃は病魔に犯されていることを先生は自覚されていたようで、ゆく先々の人々に説法されている時はこれは最後のことばと考え、まさに身心を挙げて禅の心を伝える日々であったといわれる。最後は車椅子に乗って説法に出かけ、力尽きるまで体を休められることがなかったらしい。

退任後、二年数か月で遷化されるとはだれが考えたであろう。本研究所の所長職を退任される折にお別れを惜しんだのは、学内で会えなくなることを惜しむ意味であったが、これがこのような悲しい永久の別れになるとは私だけでなく、全所員もまったく思ってもいなかった。私は本研究所の年報第八号で先生の退任を惜しむ巻頭言を書き、またこの年報第十一号で先生の遷化を悼む巻頭言を書くことになろうとは、ことばに表わせない不思議な因縁である。

先生の安らかなご冥福と、釈迦牟尼仏世尊の仏浄土における獅子奮迅のご遊化を祈念して止まない。本年報は鈴木格禪元所長の追悼号であるが、先生の遺稿とも言うべき論文「道元禅の世界―わたしの遍歴と邂逅」を掲載することができたことはこの上もない喜びである。

本年報には恩田彰博士とハインリッヒ・ワルネファ教授のお二人の、示唆に富むご講演の内容を掲載した。山内舜雄博士か

鈴木格禅元所長の遷化を悼む（田上）

二

ら重厚な論文をご寄稿くださり、また、若い学者の力作も加わり、追悼号にふさわしい年報となったこととはご同慶の至りである。

駒澤大学禅研究所長 田 上 太 秀

（故鈴木格禅元所長の履歴、ならびにご業績その他については『駒澤大学仏教学部論集「鈴木格禅教授退任記念号」第二十八号、平成九年十月刊行、また、『駒澤大学広報』第二五九号（平成十一年九月三十日）に詳しく掲載されているので、ここでは省略した。）